

国籍は天にあり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 司郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24626

「国籍は天にあり」

文学部教授 佐藤 司 郎

フィリピン信徒への手紙、第三章二〇節

²⁰ わたしたちの本国ほんこくは天てんにあります

今日は今年度最後の礼拝です。卒業あるいは修了予定の四年生や大学院生にとっては、大学生活の最後のチャペルということになります。それぞれの道に進まれるわけです。神様の祝福を祈ってやみません。

そのような皆さんに、またわたしたちに今朝示された聖書の言葉は、短いけれども、力強い言葉です。「わたしたちの本国は天にあります」。明治時代から使われてきた古い（文語）訳では、「われらの国籍は天にあり」と、今よりもっと簡潔でこころに残る言葉で訳されていました。

「本国」という言葉は国籍ないし市民権という意味ももっている言葉です。ですからこの手紙の筆者使徒パウロは、キリスト者として私たちは、もちろん今生活している共同体の一員、その市民であるけれども、それだけではない、天に国籍をもつ者、神の国の市民権をもつものだと言っているわけです。その意味で二つの現実を生きているといっているのです。

私たちがこの世の、地上の共同体の一員であるだけでなく天的な交わりに属しているということは、何かわれわれ人間が造りだしたものの、こしらえた現実ではありません。むしろそれは、他のものから決して奪われてしまうことのない、社会環境が変わっても変わることはない人間存在の一つの次元を告知しているのです。ヨーロッパ近代の国家と宗教、国家と教会の關係の歴史を私は研究のテーマの一つとしていますが、近代のヨーロッパの歴史は、国家権力が、あるいは他者が絶対に介入できない人間の精神の次元を、長い時間をかけて明らかにしてきた歴史だといってもよいと思います。その意味で、われらの国籍は天にありというこの聖句は、そうした人間の譲り渡すことのできない自由の、まさにマグナカルタ、大憲章と呼ばれてさしつかえない言葉なのです（ロツホマン）。

二十世紀後半から現代のキリスト教に多大の影響を与えた神学者にボンヘッファーという人がいます。知っている人も少なくないと思います。ナチ支配に抵抗し殉教した若き神学者です。彼の遺稿の一つ『現代キリスト教倫理』という本の中に「究極のものと究極以前のもの」というよく知られた、素晴らしい文章があります。これらの言葉を使って今日の聖書を説明することもできます。「究極のもの」とは、国籍は天にありという現実です。簡単にいえば、私たち一人ひとりが神様によって受け入れられているということです。しかし私たちは同時に「究極以前のもの」にも関わって生きていますし、関わって生きざるをえない者です。マルティン・ブーバーの言葉でいうと、人

間は「われ―汝」の関係だけでなく、いつも「われ―それ」の関係も生きないわけにはいかないのです（『我と汝』）。

国籍は天にあり、それは究極以前の世界を絶対なものとしなないということです。さりとてそれを軽視して、究極のものにしか関心を寄せないということでもありません。究極のものに信頼をおいて同時に究極以前の世界に責任を負う、そうした生き方をボンヘッファーはじつにイエス・キリストに見ています。聖書が証しているように、神の子イエスは人となり、人と連帯し、人の苦しみをみな自分のものとして生きた方です。それは十字架へといたる道でした。そしてそれは神のみこころに従う歩みであるがゆえに復活へといたる道であったのです。国籍は天にありとは、イエスの生き方です。皆さんが、そして私たちがこのチャペルでもくり返し学んできた、聞いてきたのはそのようなイエスの道です。その道を胸にしまってさらに前進して行ってほしいと思います。

そのようなこれからの歩みのために、最後に一つの言葉を紹介して終わりにします。その言葉とは、これもある神学者（バルト）の言葉ですが、「最後まで一歩手前の真剣さをもって」という言葉です。ここでいう「最後」とは、究極のものであります。これはすでに申し上げたように、私たちがみな神によって受け入れられているということです。これは絶対に変わらない。そしてそれ以外のもの、それ以前のものが、自らの力でそれを獲得できるものでもないし、それを揺るがしたりすることもできないものです。究極以前のものが究極のものではない。「一歩手前の真剣さ」というのは、

究極以前のものに、何かそれが絶対的なものであるかのように関わるということではない。そうであれば、少し余裕をもって、あるいはユーモアをもって事に当たる、生きるということです。生きていく上で私たちはいかんともしがたいことにぶつかります。しかしそれは絶対的なものではない、究極のものではない。ですからそれに負けてはならない。国籍は天にあり。究極のものを見失わず、今後の人生を歩んでいきたいものです。

(二〇〇九・一九 土樋)